

東京大学駒場博物館 「矢内原忠雄と教養学部」展

鈴木勇一郎

駒場博物館の概要

各国立大学では近年大学博物館を設置することが増えているが、東京大学では本郷キャンパスにある大学附置の総合学術博物館とは別に、駒場キャンパスに教養学部附置施設である駒場博物館を設置している。

教養学部では開設後間もないころから美術博物館と自然科学博物館の二つを置いていたが、二〇〇三年に組織を統合して駒場博物館として再出発した。建物はかつての旧制第一高等学校図書館の建物を利用し、展示場は旧閲覧室を使っているので吹き抜けのかなり広スペースを確保できている。

駒場博物館は、旧制一高を中心とする学校の歴史にかかわる展示にも力を入れてきた。「第一高等学校創立一三〇周年記念・駒場の歴史展」(二〇〇四年)、「一高校長 森卷吉とその時代 向陵の興廃この一遷にあり」(二〇〇六年)、「平賀讓とその時代展 一高生から東大総長へ」(二〇〇八年)など、こうした歴史に焦点を当てた展示会を頻繁に開催してきた。このように大学の歴史

史に引き付ける形でその展示を構成することが本郷の総合学術博物館と比べた場合の大きな特徴であるといえる。

「矢内原忠雄と教養学部」展

二〇〇九年度は教養学部創立六〇周年を記念して「矢内原忠雄と教養学部」と題して、初代教養学部長を務めた矢内原忠雄の人物と学問を紹介する展示会を三月二十八日から六月二十八日まで開催した。

展示は大きく分けて1、キリスト教とのかかわりを中心とする矢内原の人となりと信仰2、台湾研究を中心とする彼の学問3、教養学部設立の三つの柱から構成されている。

具体的な内容をかいつまんで紹介すると、まず第一部では矢内原が私淑していた内村鑑三がキリスト教活動を展開していた今井館教友会の史料を主に用いて、矢内原の前半生がとりわけキリスト教とのかかわりの中で明らかにされている。

続く第二部では東京帝国大学経済学部植民地講座を担当していた時期に精力的に研究した台湾についても駒場博物館「矢内原コレクション」や琉球大学附置図書館が所蔵する「矢内原文庫」を用いて紹介されている。とりわけ彼が台湾を訪れた際の調査や、現地の台湾人との交流を示す資料などは興味深いものである。

最後に戦後、彼が戦時体制期に追われた東京帝国大学に復職し、初代学部長として新制東京大学教養学部立ち上げに携わった時期のことが扱われ、東京大学大学史史料室に所蔵されている「新大学制実施準備委員会」や「教養学部設立委員会」などの史料が出品されている。

今回の展示は教養学部創立六〇周年を記念しているので、キリスト者や研究者としての矢内原の営みを紹介することはもちろんだが、初代教養学部長としての矢内原をとりあげたことに大きな意義があるといえる。

しかし、彼のキリスト者として、また研究者としてのさまざまな葛藤が前半の展示ではよく表現されているのに対し、教養学部長就任以後については物足りなさが否めなかった。学部長のあと総長を歴任したように、その後の矢内原は大学の行政官として大きな役割を果たすようになった。確かにその過程を通じて彼と「学生との間には常に信頼関係が保たれて」いたことも間違いないのであろうが、ただ同時にきれいなことでは済まされないさまざまな難局に直面したことも事実であろう。個人的にはその辺りの葛藤をもう少し掘り下げると、さらに興行きのある展示になったのではないかと感じた。

(二〇〇九・六・一一 訪問)